

最

近の大人は精神的に成熟していない。「最近の若者は」ではない。「大人」だ。自戒も込めている。

私が校長を務める幼児教室アンテナ・プレススクールでは、毎日のように受験相談がある。特にお母さんたちと話していて感じるのは、精神的に弱いということだ。ど

んとした母親としての存在感・哲学がないと言ってもいい。もちろん、今どきのお母さんたちは年齢以上に若く綺麗だから、肉体的に「ど〜ん」としていることはないが、要は母親然としていないのだ。

核家族化や、グローバル資本主義で拝金主義が進み、古いものが伝わらなくなったからかもしれないが、今のお母さんは子育てに自信がなく、とりわけトラブルには

めっぼう弱い。

「子育て」というものは順調に行く性質のものではない。必ず何かが起こる。何せ小さな子どもなのだ。幼稚園でも小学校でも中学校でも、色々なことが起こる。

「いじめた、いじめられた」「ケガをした、させられた」「仲間外れにした、された」「先生と合わない」「先生が依怙鼻息する」「友達がつくれぬ」「悪い友達とばかり遊ぶ」「勉強がわからない」「やる気がない」など、トラブル続出が当たり前だ。

そういうときに、昭和のお母さんたちは毅然と対応していたような気がする。自分の母親を言っているのではない。その時代の母親全員が「プロの母親」だった。

母親に限らず、父親もそうだった。

た。昔の大人は、子どもの言うこ

とをいちいち真に受けなかった。小さな子どもの言うことには根拠は乏しく、大人が大局的な視点から判断していた。

また、子どもの前で言うてはいけないことは、決して子どもの前では話さなかった。いわゆる「大人の話」である。今は、醜い大人の事情も子どもの前で平気で話す親が多い。「家族だから何でも正直に話す」「子どもにも関係があることだから、一緒に聞いてもらう」というのが論拠だが、子どもはまだ成長過程で、話を受け入れる準備が整っていない段階かもしれない。そういうことを無視した「勘違い民主主義者の自己満足」にすぎない可能性もある。それというの、とりわけ今の親たちが「プロの母親」に育てら

耳の
痛い
ハナシ

文
石井至

第6回

プロの母親

れて「子ども」としてすくすく大きく育ったが、「プロの母親」の哲学を学ぶことなく親になってしまったことが問題なのだろう。

昔の母親は自己犠牲そのものだった。何よりも子どものことを最優先だった。自分のことは後回しだった。しかし、最優先にされて育った子どもたちが親になった今、親たちは肝心な自己犠牲を身に付けていない。それどころか、大人になっても「優先されて当たり前」の意識から抜け出していない。

「時代が違う」と片付けてよいのだろうか。アンテナ・プレススクールはサービス業だと割り切っているのに、苦言をお客さまに言うこととは、内心は「大人なんだから、もつとしっかりしたら？」と言いたくなる時がある。

いいいいたる

1965年北海道札幌市生まれ。東京大学医学部卒（PhD）。当誌アドバイザー、関西大学経済政治研究所研究員（「子どもの安全とリスク・コミュニケーション」）、東京都市大学付属小学校学校評議員等を務める。『慶應幼稚園』（幻冬舎）など著書多数。

子どもの才能を引き出すeducation誌

duccare デュケレ Vol.12

日本経済新聞出版社 定価980円

公立中高一貫校
国立大合格
ランキング

わが子に本当に合う学習法を探せ!

算数メソッド 超厳選8

家庭で身に付けさせたいのは

学力よりも
「学び力」

“濃い夏休み”に
変えるコツ

「海外留学」
という選択肢

偏差値で中学を選ぶ時代は終わった!

学校選びの 新基準

新
連載

内藤 誼人
「家族のユーモア心理学」

